

口頭発表「動物と共存しつづけた保育55年の歩みの意義」

—いのちの大切さを育む大地保育から—

塩川寿平



1 はじめに（大地保育とは—野中保育園の環境と保育実践について—）

(1) 歴史・園児定員・大地保育・保育目標
社会福祉法人柿ノ木会が経営する野中保育園は1953年（昭和28年）に創立され、今年で55年目、半世紀余の歴史をもっている。

所在地は、静岡県富士宮市、園長は塩川寿一、園児定員は120名（0歳～2歳児30名、3歳児30名、4歳～5歳児60名）である。

野中保育園の特色は『大地保育』を実践していることである。大地保育とは、太陽と水と土に象徴される自然環境を十分に取入れた自由保育方式の総称で、「汲みつくすことのできない宝庫である大自然に挑むなかで子どもたちが育てられていく保育」である。

大地保育の保育目標は、「何をするにも自分で開拓できる子」である。

そのための三つの柱がある。

①創造性の豊かな子（精神の内面の強さ・何にでも興味を持つ意欲を育てる＝新しい価値を生み出す力のある子）

②社会的役割のとれる子（心のやさしさ・思いやりを育てる＝相手の立場に立って考えられる子）

③心身の丈夫な子（精神的にも肉体的にも健康に育てる＝どの子も、たとえ障害を持っていたとしても心身の健全な子）

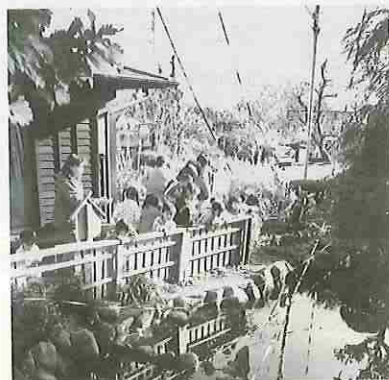
(2) 園舎論・園庭論

この園の大きな特色は、大地保育を支える素晴らしい保育環境の「園舎」と「園庭」のあることである。

まず、園舎は「野中ザウルス（恐竜に似ている）」「野中丸（船に似ている）」と呼ばれている二つがある。共に巨大遊具構造（遊環構造）の園舎であり、子どもが知らず知らずのうちに遊びに誘われ、遊びの中で心身の発達を促進するように考えられた建築様式である。なお、この園舎の設計者は大地保育に深い興味と理解をもたれていた若き日（1971年）の仙田満（東京工業大学名誉教授）である。

次に、園庭であるが野中保育園の前身は農家であり、その農家の田圃と柿の果樹園がそのまま園庭となって発展し今日に至っている。広さは約3000坪（約1万㎡）あり、起伏に富み、ニッケの巨木などの多くの常緑樹・ケヤキの巨木などの落葉樹・柿の木・桑・巨大なグミとナツメの木・その他ミカンなどの実のなる木々・桜など花の咲く木々・たくさんの草花・江戸時代に植えられたサツキの銘木などがあり、たくさんの蝉や蝶やトンボが棲む森である。

そして、園内には果樹園を1周する170mのマラソンコースと大小3基のプールがあり、水の大好きな子ども達は、果敢に水に挑戦し、水を征服し、卒園までには泳げるようになる。また水遊びの場としては昔からの池と新しいビオトープの2つのがある（写真1・2・3・4を参照）。



（写真1）昔からの池がある。人気のスポット

(3) 動物介在教育・共存の哲学

介在する動物環境は、ブタ・ヤギ・ウサ



(写真2) たくさんの金魚。保育園の友達なんだ。楽しそうだね



(写真3) キレイだね！ハスの花が咲いている



(写真4) 子どもも先生ものぞきこむ。興味は尽きない

ギ・イヌ・ネコ・ニワトリ・アヒル・インコなどの小鳥・池とビオトープにはカメ・コイ・キンギョ・ドジョウ・ザリガニなどたくさんの生き物が住んでいる。野中保育園のモットーは、『人は生活する地域に棲むたくさんの生き物と共に暮らすこと。そして共存することをなによりも基本とし



(写真5) 動物介在教育は共存の哲学から



(写真6) 人は生活する地域に棲む生き物と共にくらすこと



(写真7) 私はヤギが大好き！草をあげると食べてくれるよ

て、いのちの貴さを感じる生活をする。なぜならば、いのちの尊さはいのちのあるものからしか学べないからである（写真5・6・7を参考）。

そして、日常生活の中で不自然にではなく自然体で生き物に「触れる」・「可愛がる」ことを通して、子どもたちの情緒もまた安定していく保育を、実際には苦労や困難を克服しながら55年・半世紀余も野中保

育園は動物介在教育を守り続けている。

以上のような、保育内容や保育環境が意識的にも無意識的にも子どもの人格形成に良い影響を与え、その教育効果は大地保育の「何をするにも自分で開拓できる子」という保育目標の達成に大きな効果をもたらしている。

2 いのちの大切さを育む大地保育—植物栽培と動物飼育を通して—

この世の中で一番大切なものはいのちである。大地保育ではいのちを大切にする保育を長年にわたって続けている。子どもはどのようにしていのちの大切さを知るのだろうか。「生命」という文字を教えることでもなければ、「生命を大切にしてください」と説教することでもない。また、どんなに高価なおもちゃを与えてもいのちを知ることとはできない。

『いのちはいのちあるものからしか学べない』からである。いのちのある自然環境のなかで育てられてこそ、初めていのちと出会うことができる。それは、美しい花に感動する時であり、可愛い動物に感動する体験を持ったときである。

美しい花との出会い。綺麗だなあと見つめる子どもたち。美しい花を見た子どもたちは感動する。この感動体験に魅せられると再びこの感動を味わいたくなる。美しい花に魅せられて、吸い込まれるように再び見たいという気持ちが湧き起きる。失いたくないという心でもある。翌日、必ず子どもたちは見に来る。そして美しい花と再会し、感動する。再び見たいという心は「この美しい花」を失うことを恐れる。枯れてしまったり、盗られてしまったりは困る。ごく自然に、『世話をする』『守る』という思いやりの心や態度が生まれ、『生きていて欲しい』『咲いていてほしい』という人格が形成されるのである。水をやって世話をする。摘みとったり、折ったりすることから守る。優しい心が育つ。明日も咲いていてほしい。生き続けてほしいと願う。こうして、いのちを大切にする心が子どもたちに育っていくのである。

また、動物に対しても子ども自身の肌でふれるチャンスをもつことからしか動物を知ることとはできない。我々大人がしなければならぬ努力は、動物に触れる体験の持てる動物飼育の環境を子どもたちのために準備することである。可愛い子犬を抱いて

ごらん下さい。必ず、ほほをペロッなめられる。ナメられた子どもたちは大喜び、やわらかい毛の手触りと、子犬の体温のぬくもりにうっとりとしてしまう(写真8・9を参考)。



(写真8) 私たちヘンリーとお友達。ヘンリー大好き(ヘンリーは保育犬の名前)



(写真9) 消防自動車に乗ってアンナとメリー(保育犬の名前)と一緒に旅をするんだ

心から『かわいい!』という感動を味わう。保育園の帰りの時間になっても、子犬を抱いて放そうとしない。子犬との別れが辛くて去りがたい気持ちになっているのである。「また、明日、一緒に遊ぼうね」と、先生が声をかけてあげると、やっとうなずいて子犬を小屋にかえして帰っていく。翌日、必ずその子は子犬を抱いている。可愛いという体験は、放したくないという心に変わり、再会の強い希望となる。この共にありたいと願う気持ちは『共存本能』であり、私の仮説であるが『人の心を安定させる遺伝子DNA』であると考えている。再会するためには死んでしまったりは困る。そこで生きていてほしいという心が生まれるのである。水をやる。エサをやる。雨にぬれないように小屋を作る。こうして優しい心が育つのである。可愛い動物との出会いは、いのちを大切にする心を育てているの

である。

『死んだら困る』『死んだらかわいそうだ』『死んだら自分の身を切られるほど苦しい』と実感するのは実はこの「いつも共にありたいと願う気持ち＝共存本能」を豊かに育てていることにほかならない。このような気持ちを持たない子どもに育ててしまうことは、教育の失敗であり、教育の敗北である。なぜならこれほど不幸な子どもはいないからである。

大地保育の真髄は、たくさんの草花を育て、いろいろな動物を育て、「美しい」「かわいい」「いつもそばにいてほしい」「共にありたい。いっしょに暮らしたい」という生命エネルギーの根源である共存本能を感動体験をもって育むことにある。

3 動物介在教育について保育園での事例を通して考える

【事例1】台風でひまわりが折れてしまった

一生懸命に育てたひまわりが台風で折れてしまった。自分で育てたひまわりには愛情がのりうつっており、自分自身の分身であり「なくてはならない存在に育っていた」、共存していたのである。無残に折れたひまわりを見て言葉も見当たらず嘆き悲しむ。泣き出してしまう。

泣くこと以外に精神の安定を取り戻すことはできない。このような誰にも責任を持っていきようのない、どうすることもできない場合に泣くことは、苦痛の浄化作用(カタルシス効果)であり、精神を安定させる治療である。たくさん悲しむ。悲しむだけ悲しむ。水をやり忘れて枯らしてしまった時などは自分の責任を強く感じ、これからは失敗しないように気をつける。今回は台風で折られたわけであり、台風の怖さも知り、どうすることもできない弱い自分(人間)にも気付く、自然の恐ろしさも知り、耐える心と立ち上がる心が生まれるのである。自然に対する畏敬の念や、自然に対する謙虚さも同時に学ぶのである。

今日の教育の欠点の一つには、自然に対して傲慢な子どもや大人を育てたことがあげられる。「自然に対する畏敬の念」や「自然に対する謙虚さ」を子ども時代に育てることは教育界の急務なテーマである。

【事例2】文鳥が鳥かごの中で死んでしまった

かわいがっていたクラスのこどもと先生は泣いていた。4歳の男の子は「起きろよ」

などと指先でつついて呼んでいた。死について教えようとしても、言葉や理屈で伝えられるものではない。このような出来事が実際に起こったとき、一度死んでしまうとあとでいくら愛情をかけても生きかえらないという厳しい生命の摂理を学ぶのである。

幼児教育の父であるフレーベルはこのような大切なことを、こどもは体験を通して『直観によって学ぶ』と、直感の大切さを述べており、私も自分の体験を通してその通りだと考えている。

この悲しい出来事は、野中保育園でどのようにして起こり、どのように事後処理されたのかというと、土曜日に水と餌を十分にやらずに帰ってしまい、土曜日と日曜日の2日が過ぎ、月曜日の朝の保育室での光景である。悲しんで、泣いて、そしてみんなでお墓を作って、お花もお線香もあげて弔いながら反省した。「先生、こんど土曜日に忘れないように気付けようね」と、子どもたちから言ってくれた。生きた言葉である。先生も同じことを考えていたときなのである。

特に、小さな小鳥は2日間も水も餌もやらなければ死んでしまうことがある。動物を飼うと死ぬから嫌だという人がいる。死ぬと可哀想だとか、嫌な気分になるから嫌だという人もいる。しかし、本当の死を理解しない限り、生きているといういのちの大切さを理解することは不可能なのである。

子どもたちに見せずに先生が処理してしまう場合があるが誤りである。子どもたちと共に事後処理をしない限り死の現実を理解することはできない。それでは子どもたちから「生と死を理解する尊い機会」を奪ってしまうことになる。死という現実を前にして、悲しみと涙の中から「失敗をくり返したくない」という心が育つのである。大人の間違った感傷的な態度から、誤った指導をして欲しくない。

【事例3】『人間と生き物の共存の精神』を次代を担う子らに育てたい

動物を飼うことが大変だと思う方は、メダカや金魚、モルモットやハムスターなど小型で比較的飼いやすい初心者向きの飼育から始めてほしい。動物を飼うには知識も技術も身に付けなければならない。必ず近所の獣医さんと委託契約を結んで、日常的

に保育者も子どもも共に指導していただくことが必須条件である。

動物を飼う知識も技術も身について飼育に自信がついてきたら兎や犬や猫など、レパートリーを少しずつ増やして、いろいろな動物と生活を共にしてほしい。そして、この地球に共に住む『人間と生き物の共存の精神』を、次代を担う子どもたちの心に育てたい。

なお、われわれ保育園での経験から言えることは、抱ける動物を飼うことが動物選びの大切な点だということである。私は犬・猫・兎が最適だと考えている。抱かないと可愛らしさが伝わらないからである。初歩的な段階においては、見てだけの観賞用動物でも良いが、それでは子どもたちとのかかわりが薄く、実感が乏しく、教育効果が弱いと考えるからである。(写真10・11・12を参考)。

園児の中で体格が一番大きく暴れん坊で



(写真10) お父さんが犬大好きならば、赤ちゃんの時から犬大好きになれる



(写真11) ふわふわの毛だよ、僕たちウサギさんの抱き方知ってるよ



(写真12) エサのあげかた、僕たち先生に習ったよ。

みんなから怖がられているA男が、子犬を「優しく」「優しく」「本当に優しく」抱いている。どうしようもなく可愛いという感じで抱いている。まるで壊れもののように丁寧に抱いている。このような子犬とA男の出会いに立ち会っていなかったならば、この暴れん坊にも「こんなに優しさ」があったのかと知ることはできなかった。この出来事は、私にとっても子ども理解の再発見となり大切な経験であった。

4 保育所における動物介在教育と保育者の責任

私は長年動物介在教育に携わってきて考えるところがある。保育の片手間で動物介在教育を行ったら必ず失敗するというのである。一つの動物を飼育することになったならば、一人の園児が入園してきたのと同じように、一つの動物の世話を本気で仕事と考えなければならない。

保護者から家庭で飼えなくなったからと兎をもらったりすることがある。何の心構えもなく、準備もなく、気軽に今までの保育の仕事量の合間にチョイチョイと片手間に世話をした場合、大変な苦痛と感じるようになる。そして必ず死なせてしまう。簡単には飼えない複雑な仕事の質と量であることを承知して欲しい。その覚悟が大切である。

保育所には0歳児から6歳児までの子どもがいるわけであるが、園児が世話する割合と保育者が世話する割合について、発達過程を考えた取り組みが必要である。

私の経験から述べさせてもらおうと、0歳児と1歳児は、「見て楽しむ」「保育者が伴って動物に語りかける」「保育者が伴っ

て餌をあげる」などである。直接的な動物を扱う世話は100%保育者の仕事である。

2歳児と3歳児は、「保育者が伴って園児自身も動物飼育の世話（野菜をきざむなど）を10%程度する」などである。しかし、毎日の餌や糞尿の処理などの直接的な世話等は、全体の90%は保育者の仕事と心得るべきである。

4歳児と5歳児と6歳児であっても、園児に任せる飼育に関わる仕事の量は20%程度である。残りの飼育にかかわる仕事の80%は保育者の仕事である。

保育所や幼稚園で飼育する場合は、小学校や中学校の場合と飼育目的は大きく変わる。主目的は、『共に暮らすということ』が重要なのであり、『生活の中に動物が居ることを感じて暮らすことが大切』なのである。乳幼児に世話をさせることは主目的ではない。

5 『共存の哲学』をしっかりと身につけよう

まず、教師たるものの覚悟しなければならない。動物介在教育は、現在の日本においては大変に困難な仕事である。しかしながらやらねばならない仕事である。なぜならいのちはいのちあるものからしか育てることはできないからである。生命尊重の教育はいつの時代にあっても教育の中心である。生命尊重の教育なくして教育は存在しない。

私は、1938年（昭和13年）生まれである。今年の誕生日で70歳になる。終戦直前の昭和20年4月に小学校に入学した。私たち一家は満州からの引揚者であるが、日本の引揚げ先が静岡県富士宮市の父親の実家で農家であった。私は大学生になって成人しても農業を手伝った。戦後、我が家では養豚場を経営していた時期がある。私は子豚の牡の去勢を手伝った。私は足を押さえて、父親が去勢の処置をした。牡の豚は去勢して育てて食肉として出荷するためである。山羊も乳を絞って売るために飼った。私はその山羊乳を絞って売るために町まで配達した。うさぎも食肉と毛皮をとるために飼った。私は兄弟姉妹といっしょに兎の餌のレンゲを田圃に毎日毎日刈りに出かけた。農家には現金収入がなかったから子どもたちもそのようにして現金を手に入れ学用品などを買った。思えば、この時代に私は動物を飼う知識と、技術を大人たちに手ほど

きを受けて身につけたのである。

当時の農村ではどこでもそうだったと思うが、大人も子どもも家族みんなで動物を飼っていた。子豚が生まれる時にはひと晩じゅう私もつき添っていた。無事にお産が終わった時にはとても幸せな気分になった。山羊が病気の時には、獣医さんが来るまでオロオロと過ごした。あるとき山羊が小屋から逃げてしまい、干してあった大麦をたくさん食べてしまいお腹が膨らんで、獣医さんが駆けつけたが死んでしまった。子兎が生まれて土の穴から育った子が7匹もゴロゴロと出て来て、ピョンピョンと跳ねていた時には言葉もなく見続けた。可愛くてただ胸がつまった。家ではいつも番犬を飼っていた。大きなシェパードで私はボールを投げたり、拾ってこさせたり芸をしこんだ。

田んぼはまだ牛や馬が耕していた時代である。まさに人と動物が共存していたのである。

当時の私の愛読書の1冊は「黒馬物語」であった。何回も繰り返して読んだ。大人たちはとても動物を大切に世話をしていた。私たちはそんな大人の後ろ姿を見て育った。今日の日本を見るとそのような風景はどこにも見当たらない。教育の原点は『親のうしろ姿を見て育つこと』であるが、大人たちが動物の世話をしたり、子どもたちがその後ろ姿を見て育つということもなくなった。

そのような時代にあって私たち教師は、なおかつ動物と共存することの大切さを子どもたちに伝えなければならないのである。これは相当困難な話であるので覚悟してかかればならない。生易しい仕事ではない。創造的な教育哲学と教育教材と教育技法を開発しなければならない。昔のように動物飼育の実際が至る所にあった時代とは違う。

現代では自然を実感しない社会生活のなかで自然を教えなければならない困難さがある。私は雨が降ると感謝することを常に教えられて育った。雨乞いをする姿も実際に見てきた。田植えができるからである。今日でも人々にあえて質問すれば概念的に雨は大切であると答える。しかしながら実際には365日の中で1日でも雨が降れば嫌がる。学生もサラリーマンも傘をさして歩くことを面倒くさがる。雨が降った日は「つ

いていない」と嘆く。

太陽が出ると紫外線の害があるという。肌にソバカスができる。シミができると嫌がる。日常的に雨や太陽に感謝する大人が身近にいなくなった。自然に対して感謝する大人の姿がなくなった社会にあって、私たち教師は子どもに雨に感謝することや、太陽に感謝することを教えなければならない。容易な仕事ではないが、教育界の英知と団結で乗り越えるしかない。

結論として、どんなに困難な教育であろうと立ち向かわなければならない課題である。この大会を機に心新たにがんばろうではありませんか。

【見学連絡先】

- ・大地保育の見学日：火曜日（TELまたはFAXかEメールで連絡をください）
- ・連絡先：〒418-0033 静岡県富士宮市

野中東町300 野中保育園

・TEL 0544-26-2929 FAX 0544-26-2931 Eメール doronko-nonaka@trust.ocn.ne.jp

- ・「野中保育園」のホームページを見て、保育内容をあらかじめ理解して来てください。

【参考文献】

- ・野中保育園編「大地保育（写真・論文集）」2003年 野中保育園で販売 ￥2000
- ・塩川寿平「名のない遊び」フレーベル館 2006年 ￥2000
- ・塩川寿平「どろんこ保育」フレーベル館 2006年 ￥2000
- ・塩川寿平「大地保育環境論」フレーベル館 2007年 ￥1800（こども環境学会論文賞受賞）

（大地教育研究所所長）

